月刊ナイトバグ　そうだアリん家行こう型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2010年12月号
夏には歌っていた私だから、冬には異変でも起してみようか。
「冬／越冬」特集
読切り作品
SS ：中国／くろと
漫画：イリイチ／斑／羅外／東／13／残虐非道の貴公子／
連載作品
SS ：悠奈
漫画：preudenano／草加あおい／ぼこ／クロツク

月刊ナイトバグ　2010年12月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

●時には苦く、時には甘く。 熱くなる事
まるで恋愛のような珈琲とお茶漬けの出
今流行の珈琲茶漬けが、ついにインスタ
※嘘広告です。 発行：珈琲茶漬け 発行者：言示弄
12月号テーマ
冬/越冬 特集
『冬の待ち合わせ』 言示弄
寒い冬の待ち合わせには
あったか〜い缶コーヒーをどうぞ。

『 クルクルリグル 』　ADDA

『ひえぇ！？　あぁ…もうっ！　だからスキーは下手だと言ってたのに…』

『 教室のストーブ 』　蛍光流動

この型ってもうこっちじゃそう見られないそうで。

『ヤマメに防寒具を貰った』　貴キ

手編みのマフラーと帽子と手袋らしいんだけど何だかネバネバしてるのは気のせい…？

『ゆきおとも』　怒羅悪

こんばんわ、どらおです。時間が無かったので冬っぽいイラストだけです！
おともは居ます！雪というか氷に見えるよ！ では、失礼しました。

ジリリリリリリリ

ふぁ……
あぁあぁ……

ガッ

オユキコジョロ
作 斑
うー、めっきり冷え込んできたなぁ…
のそっ

モコ
冬期仕様
モフ
住み心地どう？
快適ですわ
もっと目立たないところに!!
ファス!!
育ってる？
この腐葉土おいしいです

うわ、もう日暮れかぁ…
今日はこの辺にしとくかな

はい、おまちどーさん

ぷはっ
美味しー！

それにしても毎年ご苦労さんだよねぇ。冬眠中なら放っといて良いんじゃないの？
あーダメダメ

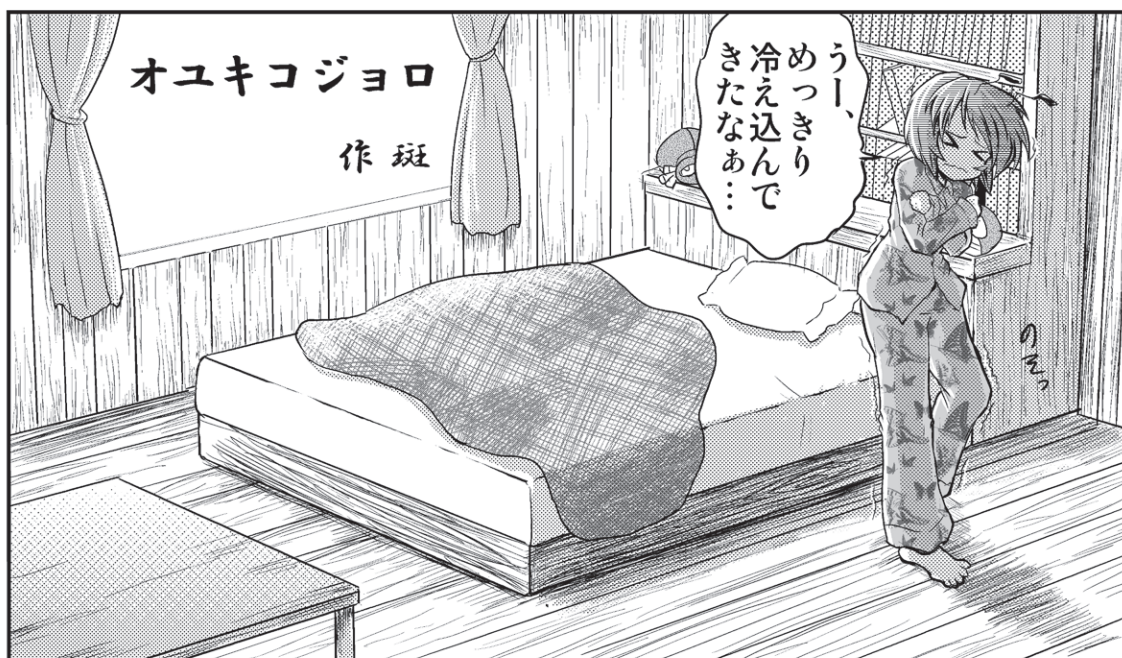
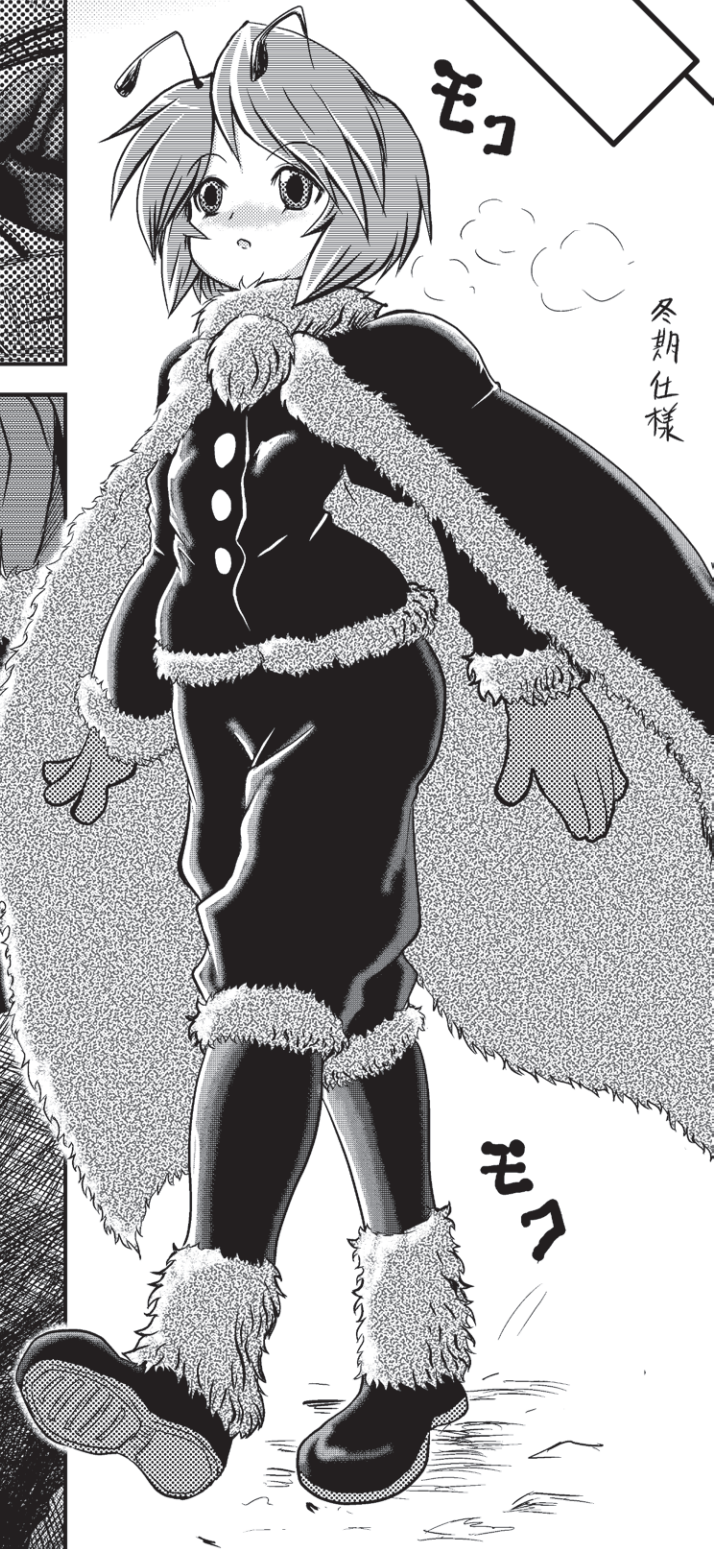
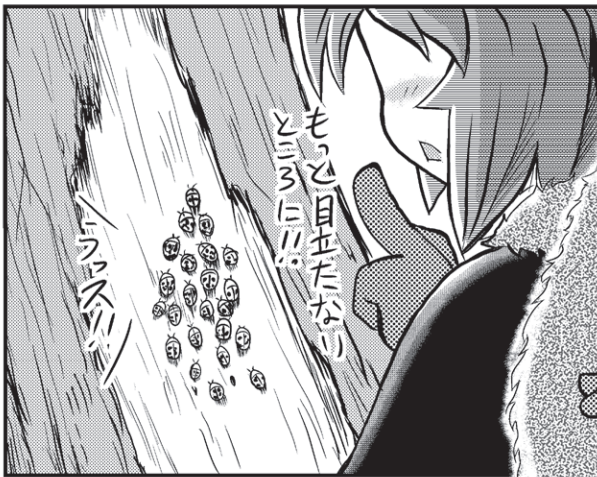
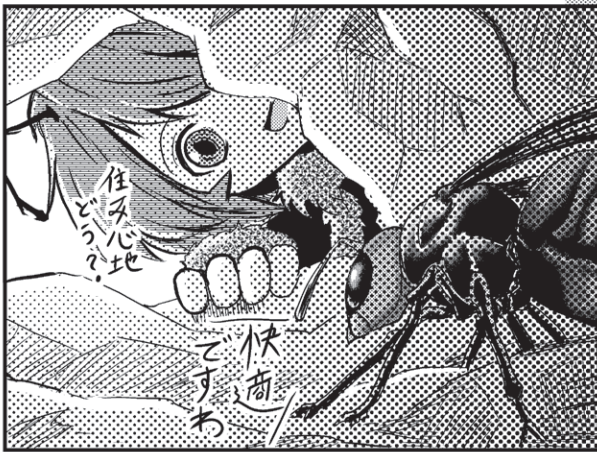
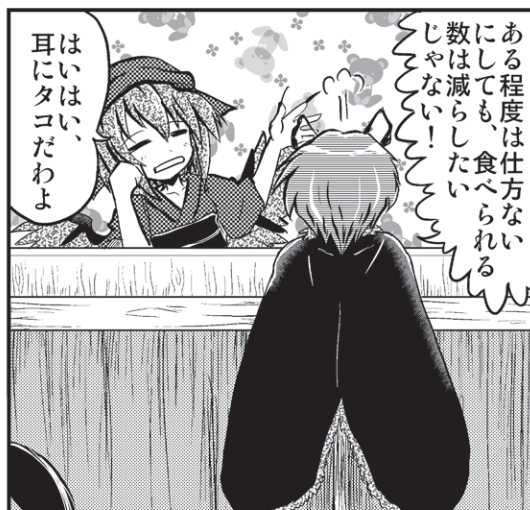
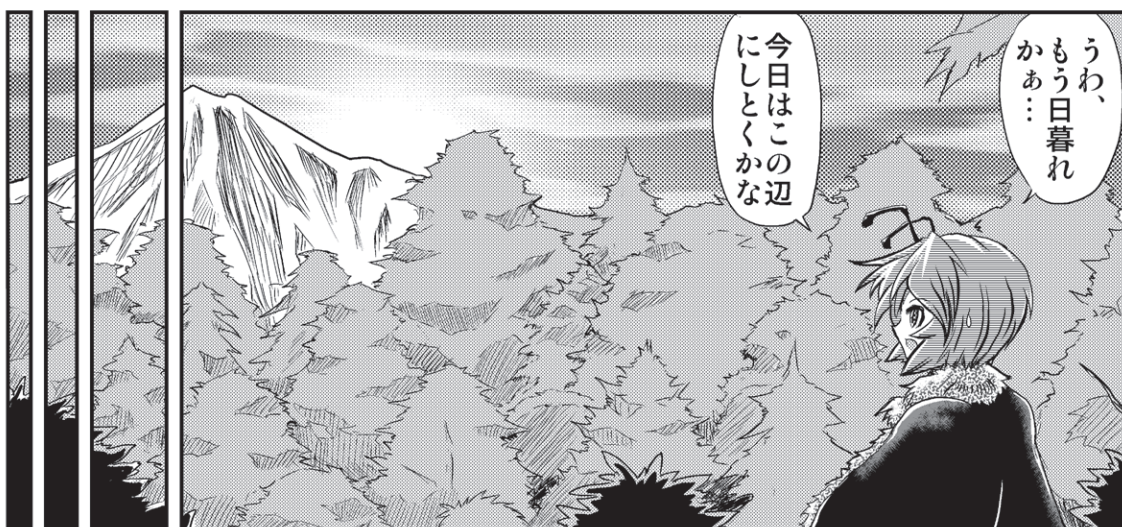
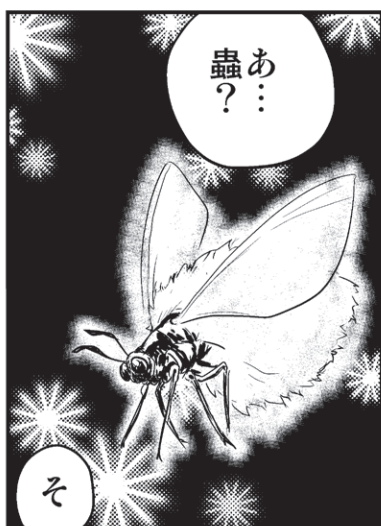
獣の冬眠とは違うんだから
相当な数が越冬中に食べられちゃうのよ？
お猿とかマジ悪魔
道具使って責めてくる

ある程度は仕方ないにしても、食べられる数は減らしたいじゃない！
はいはい、耳にタコだわよ

おおおおお!?

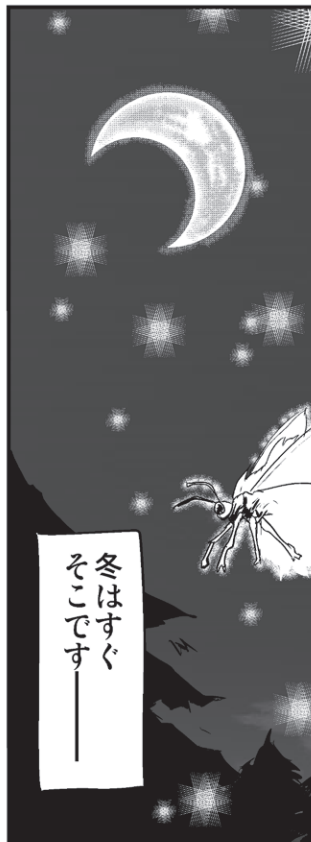
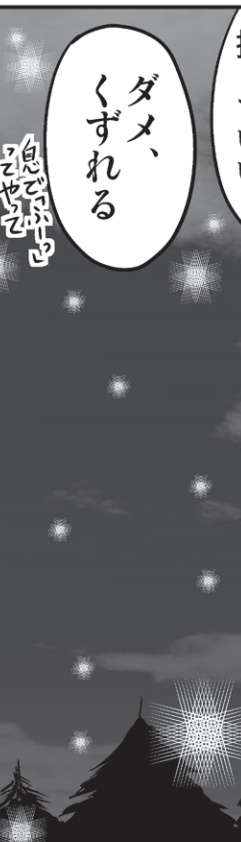
わ、雪だよ
随分と早いね
あー
違うよ

へ？

あ…
蟲？
そ

『雪虫』って言うの
越冬の為の卵を
産む為だけに生まれた、
儚い蟲達よ

今まではそんなに
目立つ蟲たちじゃ
なかったん
だけれど…
ここ何年かで
初雪の少し前に
たくさん出る様に
なったのよね
ここまで多いのは
初めてだけど

あ、触ら
ないでね
雪みたいなのは
外見だけじゃ
ないんだから
体温でも
弱っちゃうの
なんと!?

まぁ綺麗だからいいじゃない
…ねぇ、さっきから服にひっつくんだけど掃っていい？
ダメ、くずれる
息で「ふーっ」てやって
どんだけ脆いのよ!!
冬はすぐそこです――

今年も冬が来る

冬でも半ズボンの子が
クラスに一人はいたよね
描いた人　東

おり アホが!!

くわっ!!

半ズボンじゃないリグルなんてリグルじゃないよ!

……

あとチルノのくせに正論言ってんじゃないよ!

寒いのはつらいですがこの季節は嫌いじゃありません

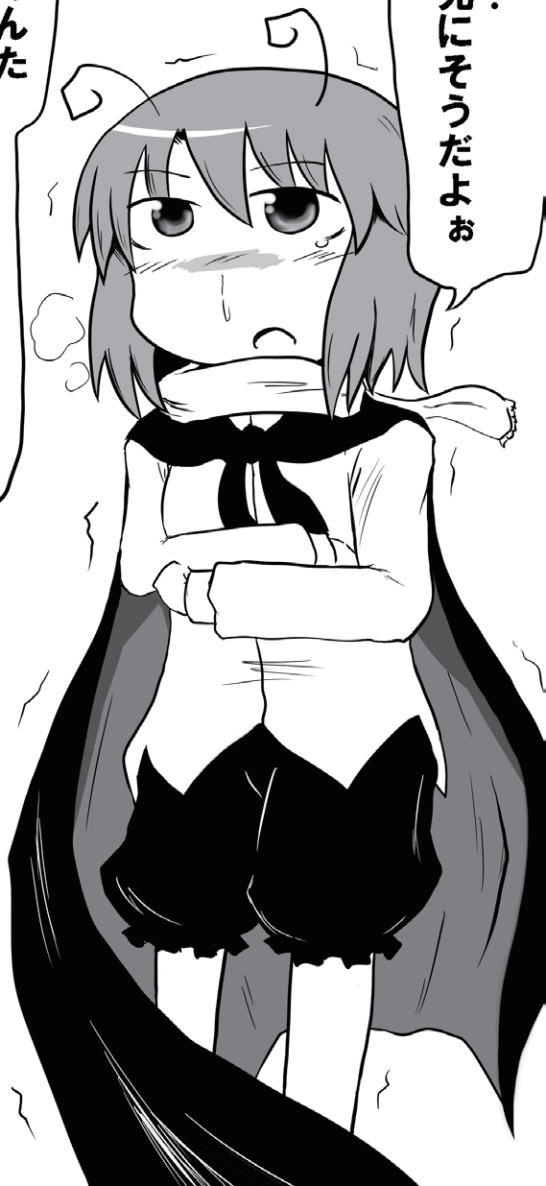
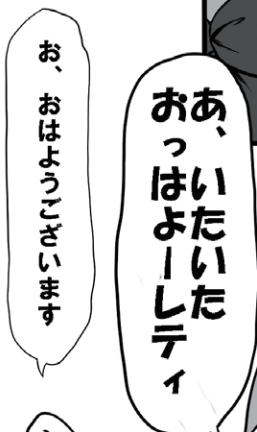
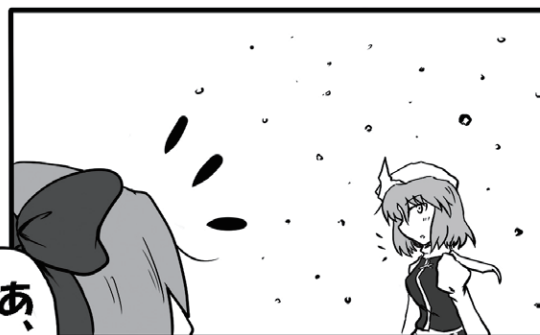
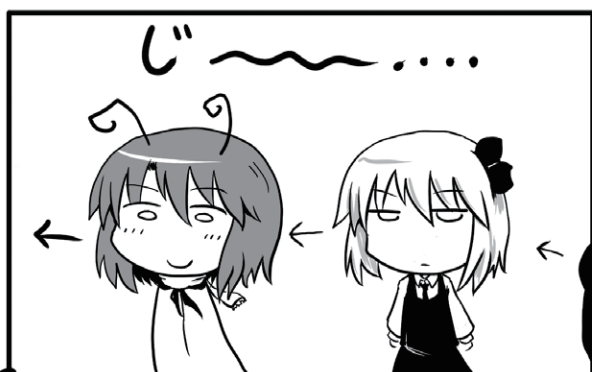
うぅ ひどい…

だって…

冬が来れば
あの人に会えるから

やっほー
あ、いたいた
おっはよーレティ
お、おはようございます
こそっ

おはようチルノ
今日も元気ね
もちろんだよ☆

今日もレティさんはステキだなぁ・・・
眩しすぎて直視できないやｗ
フヒヒ・・

チルノやルーミアとは違う
昨日また赤壁快進撃にやられてさー
赤壁死ねばいいのにねー
レティさんは大人の女って感じがして、いいよね
じ～～～…
リグルあのさぁ…
ページもないから単刀直入にきくけど
ドキッ
レティのこと好きなんでしょ？
え…
これまで数えきれない男を食べてきた私にはわかるんだよ(リアルな意味で)
いや…その…
ああーん？

違うよ…
レティさんのことは
好きとか…
そうゆうのじゃなくて
私は…
私は…
私はあの人に思いっきり
見下されたり虐められたり
したいのよ！
結論 リグルはドMでした
ふまれたりとか
ゾクゾク
そーゆう
カミングアウトは
いらねーんだよ！
おわり

ゴー
ブヘェ

見んな！
こっち見んなぁっ！

防衛本能で臭い汁
飛ばすぞコラァアアッ！

おい、パロは
先月で終わったでしょう

前回許してもらったからって
調子のんな

クロック

あ！
むしがしんでれぅー
あっ！秋のお姉ちゃんだ！
あきーん
ねえ、しぬの？
死にそうだよ…ナウく言うとMK5だよ……
うけるーなにそれーっ？
もう こごえ続けて5週間だよ……
ははは まじうけるー
姉さんはいっしょじゃないの？
つぎのあきまでねてるよー
そうなのかぁ…ああ、なんかもうダメな予感……
ははは むしのしらせってやつーー？
マジひくわ
私なにも言ってないじゃんっ
秋の神様ー！おねがいがあるんドスー！
なにー？うけるー
わたし、虫なので落ち葉かかれ木をいただけまへんか…
むしーん
んっ？！なにっ？！
エロイ
いや、テントウムシは落ち葉とかの下で冬をこすんです……
そうなのーっ？
だからすいまへんがおろかな虫けらに葉っぱを葉っぱをひとつ……
バイQ～
どうしてそうなったっ？！
YATTA

えいっ！
えっ！なにっ!?
ガバッ
へへへーわたしのふくってもみじでできてんだよー
それにこうしたほうがあったかいでしょー？
……
そうですね…
でしょーっ？
あったかいんだけど…
あだめだ……このヒト無意識に養分を吸ってる…
きれいな冬虫夏草が咲きました

唐突に気づいた
今年は何かを越えなきゃいけない！
でも、困ったことにそれが何かがサッパリィなのよね
ウーん健忘症かしら
When they Wriggle
じゃああたし達が考えてみるわよー
はーい皆集合ー
私と一線
お断りします断固ご遠慮します
あなたと越えたいー
それは天城越えって、山を燃やすな！
あんあん
それは喘ぎ声
ダメなヤツ…
俺の屍
フッー
私と一線
確か去年も言ってた気がするわ
ボケてとは言ってないわ
も、もしかして
私と一線を！
あ、冬だわ

リグルともこたん

描いた人：ぼこ

初雪へのカウントダウン

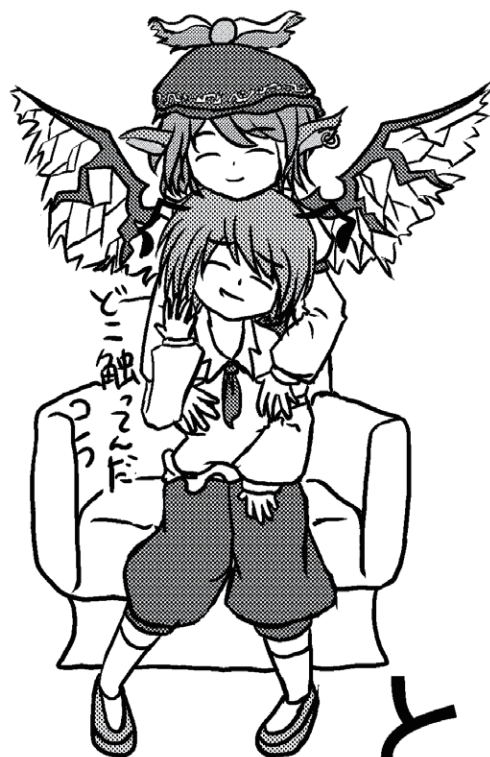
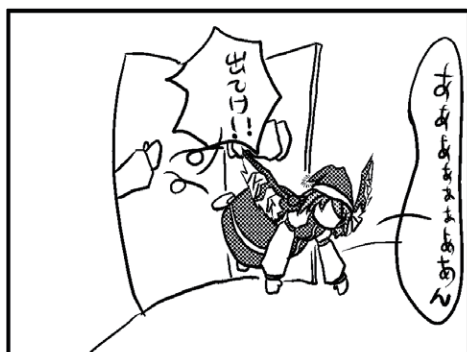
楽屋ウラ的なにか。

番外編

かいた人
草加あおい

毎回変わるカップリング

落ちずに終わる　ゴメンナサイ

田舎の学校の悪夢

ミスリグ
ときどき
リグリリ
by 残虐非道の貴公子
どこ触ってんだコラ
今日はみんなで
リグルちゃん家にお泊まり
じゃあみんなが寝るとこ…
まくら
ねぇリグルちゃん
私はどこで寝ればいいかなって
出てけ!!
あぁぁぁぁぁぁぁあん

蟲カゴ

～ Compensation to fantasy ～

著者：悠奈

～あらすじ～　リグルと妹紅は紅魔館から逃げて来た美鈴と出会うが、フランドールが現れる。そのあまりのプレッシャーに三人は別れて逃げる。再び独りになったリグルに寂しさと疲労が襲い、森の中で眠る。そこに二人の少女が現れてリグルを運んだ。

「……んぁ？」
間の抜けた声を出してリグルは目覚める。ボーッとした眼をごしごしと腕で擦る。
「……ああ、眠っちゃったのか。それにしても……」
嫌な夢を見た。リグルはそう呟いて眼を瞑り、先ほどまで見ていた夢の事を思い出していた。それは昨夜チルノと自分のやりとりだった。
――裏切り者
眼が覚めた今でもチルノの声が脳裏に焼きついて離れない。
「……違うっ！」
リグルはそう呟いて両手でシーツを握り締める。
「……？」
リグルは眼を開いて気がつく、ここが誰かの家で誰かのベッドの上で寝ていた事に。リグルの記憶では、木の根元に座り込んでいて、眠ってしまっていたはずだ。状況が掴めず周りを見渡してみる。自分の居るベッドのすぐ横には窓があって、日光を部屋に取り入れている。窓の外を見る限り、ここは森の中の開けた場所にある、という事が分かる。再び室内に眼を戻してみると、周り一面はちらかっていて、本棚に収まらなかったのであろう、大量の本が床に積み上げられていた。部屋と外を繋ぐドアからベッドと壁際の机までの道以外は床が見えない程ちらかっていた。机の上には容器に入った怪しげな茸が何個も置いてあって不気味だった。
（何ていうか、童話の怪しい魔女の家みたい……）
リグルがそう思っていると部屋のドアが開く。
「よぉ。お目覚めかい？」
リグルの姿を見て、部屋に入って来た少女が片手をあげて明るい声で話しかけてくる。それはリグルも知っている顔だった。
「あ……魔理沙。私なんでこんなところに？」
霧雨魔理沙、人間の魔法使いで、神社の巫女とも仲がよく、宴会での盛り上げ役で有名だ。リグルは以前起きた永夜異変で「ホタル狩り」といわれて出会い頭に撃墜されたこともある。
「家主に向かってこんなところって言うのは失礼だな。」
魔理沙はカッカッカと笑いながら答える。
「早朝、魔法の森に誰かが入ってきた気配がしたら、お前さんが倒れてて、そのままにするのも悪いからわざわざ運んで介抱してやったんだぜ」
そういいながら魔理沙はリグルが座ってい

るベットに腰掛けてトレードマークでもある三角の帽子を外す。
「……ありがとう」
　リグルは下を向いて感謝の言葉を送る。
「で、お前さんはあんな時間帯にこんな森で何をしてたんだ？」
　魔理沙は自分の帽子を指でくるくる回しながら問う。
「……」
　リグルは下を向いて答えない。先の夢のせいか、リグルが昨夜の事を思い浮かべると脳内に友の一言が鮮明に蘇る。魔理沙にも協力出来るのであればしてもらいたい、けれど声に出すのは怖い。そう思って黙っていると部屋の外から声が聞こえた。
「魔理沙？どうなったの？」
　そう言って部屋に入って来た少女。その少女にもリグルは見覚えがあった。
「おうアリス。起きたのはいいがまだまだ本調子では無さそうだ。」
　アリス・マーガトロイド、人形を多く所持する魔女。リグルの記憶では、魔理沙に攻撃された夜もアリスは魔理沙と一緒に居た。アリスを見た回数が少ないリグルは、その時と今一緒に居るこの二人は仲が良いんだな。と想像した。
「……そう。何か知ってる事を話す気になったら言ってよね。」
　そう言ってアリスは手に持っていたコップをリグルの前へ乱暴に差し出す。勢い余ってコップに入っていた水がこぼれ、リグルの手にかかったが、アリスはそんな事は気にしてもいないようだ。不快に思ったものの、喉がカラカラに渇いていたリグルはコップを手にとり、一気に流しこむ。
「んく……んっ……ふぅ……ありがとうございます。」
　そう言ってコップをアリスに返す。それを見たアリスはコップを素早く奪い取り、リグルを睨みつける。その様子を見ていた魔理沙は渋い顔をしてアリスを見た。アリスはそんな魔理沙を一瞥するとドアの方に振り返り、それじゃあ。と言って出て行った。残された二人は黙ってその背中を見つめていた。
「あー……なんだ。その、あんまり気にしないでくれ。」
　沈黙を破ったのは魔理沙だった。魔理沙は気まずそうに指でこめかみの辺りを掻きながらリグルに向かって言う。
「何か、昨夜からちょっと虫の居所が悪いみたいでな……おっと、虫と言ってもお前さんが悪いわけじゃあないんだぜ。」
　カッカッカッと笑いながらリグルの背中を軽くポンッと叩く。リグルはただ黙って聞いていた。
「……まぁ、何か話す気になって、昨夜からの事で知ってることがあれば教えてくれ。」
　そう言って魔理沙は手に持っていた帽子を被り、ベットの下に置いていた箒を持って立ち上がった。
「それまではゆっくり休め。どうやら酷く疲れてるみたいだしな。」
　そう言って部屋から出て行った。リグルは魔理沙の家の一室で独りになっていた。
（……）
　独りだと寂しさ、不安といったネガティブな気持ちが湧き上がってくる。不安を消し去る為、顔を横にブンブンとふる。その時、窓の方からコンコン、と音がしているのに気がつく。リグルはベッド横の窓を見ると、そこには一匹の虫が窓にぶつかっていた。リグルは窓を開けて虫を室内に招き入れる。すると同時に冷たい朝の風が室内に入り込み室内の本が何冊か風でパラパラとめくれる。
「気持ちいい……」
　そよそよと優しい風がリグルの髪を撫でる。先ほどの虫がリグルの周りを飛び回る。
「ありがとう。君のおかげで少し気が楽になったよ。」
　心地よい風、決して自分が独りでは無い、という事を教えてくれた虫に感謝を述べる。虫はそれに答えているのか、リグルの周りを一周して手の上に止まる。
「ふふふ……」
　リグルの顔にかすかな笑みが宿る。その様子を見た虫はなんだか誇らしげにしているように見えた。そしてリグルは風の入ってくる窓の外を眺める。
（ここはいい場所だ。昨夜までの慌ただしさ

を忘れさせてくれる……）

　そう思っていると窓の外を眺めるリグルの視界に二つの人影が見えた。

（あれは……魔理沙とアリス？どうしたんだろ？）

　遠目から見てもわかる。今のあの二人はとても穏やかな雰囲気ではない。

「……」

　リグルは手の上の虫を外に放してベッドから起き上がる。たいした怪我もしてなく、体力も回復している為特に痛む所は無かった。それを確認すると、リグルは椅子にかけられていた自分のマントを身につけて二人の後を追うべく魔理沙邸を出た。

◇

　数分後、蟲達の協力もあり、二人に追いつく事ができた。二人は魔理沙邸から少し離れた森の広場で話しをしていた。

「だから、無理矢理にでも情報を引き出せばいいじゃない！あんなに丁寧に介抱してやる必要なんて無い！私達には一刻も早く新情報を得る必要があるのよ！？」

　離れた茂みに身を隠してるリグルにもアリスの叫び声がはっきりと聞こえる。どうやらアリスは相当興奮しているようだ。

「無理矢理話させたって、そんな事したら助かりたいが為に嘘を言ってくる可能性だってあるだろ？だから、本人の口から自ら話させるのが……」

　魔理沙が諭すように言う。しかし、アリスはその言い方も気に喰わないのか、再び声を荒げる。

「死にそうになるくらいに痛みつけたら知ってる事洗いざらい言うわよ！それに、何なら喋りたくなる薬を作ってしまえばいいじゃない！」

「……」

　魔理沙は黙ってアリスを見つめている。遠くからでは大きな帽子に隠れて表情を読み取る事はできないが、怒りか、悲しみで肩が震えているのは見える。

「何だかんだ言って……助けているうちに情が移っちゃってるんじゃないの！？」

「何を……！」

　魔理沙がバッと顔を上げる。アリスは続ける。

「そうやって人が甘いから、昨夜見かけた姉妹や河童みたいに情報を得られないままになっちゃうのよ！」

　魔理沙は前のめりになって反論する。

「あ、アイツらの時に無理矢理聞こうとして結局ダメで、逃げられちまったから今度は丁寧にしてだな……」

「あ、ああ、魔理沙は知らなかったのよね？あの3人が逃げた後どうなったか。」

　アリスの肩が震える。その表情には不気味な笑顔が浮かんでいた。

「あの後二手に別れて探したでしょ？あの時ね。既に私が人形を使って仕掛けていた罠にアノ子達かかっていたのよ。私、それを知っていたからあえて二手に別れたのよ。だって、魔理沙にこんなもの使ってるの見られたくなかったから……」

　そう言ってアリスがスカートをたくしあげると、ふとももの辺りに先端が尖った大振りの刃物の入った鞘があった。アリスは片手でスカートを支え、もう一方の手で刃物を鞘をスッと抜き取り、魔理沙に見せ付ける。

「お、お前……」

　魔理沙は一歩後ずさる。

「そうそう、アノ子達もそんな反応をしていたわ。でも、アノ子達の足は縛ってあったから逃げる動作なんてできなかったけれど……」

　アリスは片手で刃物の刃を愛おしそうになでる。

「アノ子達、泣きながら助けてくれって懇願したわ。そして知ってることはぜーんぶ話してくれたわ。力ってすごいわよね。何でも思い通りに出来ちゃうもの。弾幕がパワーって言うのもわかる気がするわ。」

　アリスが魔理沙に一歩近寄る。魔理沙は動かずにアリスを睨みつける。

「話しを聞いたら後はおしまい。あの3人は全員私が殺したわ。その後に魂を吸収した時の楽しさといったら……ゾクゾクしてやみつきになっちゃう。」

「アリス……気でもふれたか！？」

「私はおかしくなんかないわ。昨夜感じた使命を全うしてるだけ。全ての者を倒せ……貴女にも聞こえたでしょ？それに従ってるだけよ。」
「……」
　アリスは話しながらゆっくりと魔理沙に近寄る。
「そして私は知ったのよ。私が喰べた三人の力も私の物になっちゃってる事にね。」
「！？」
　アリスはそう言うと、近くを流れていた小川に向かって手を伸ばした。すると小川から小さな水玉が何個も浮かび、アリスの手の上に止まった。アリスが手をスッと一振りすると水は支えが無くなったかのように地面へと落ちた。
「水を操る能力……にとりのか！」
　それを見た魔理沙が叫ぶ。アリスは不気味に笑ったまま小さく頷く。
　その様子を見ていたリグルには心当たりがあった。人里で妹紅が自分の怪我を治す為に薬を作っていた事。その時に感じた永遠亭の薬師の気配がまさに今のアリスと同じ感じだった。
「私としてはアノ子も早く喰べてしまいたい……。ねぇ魔理沙。今度は二人でアノ子を……」
「ふざけるなっ！」
　魔理沙が叫ぶ。いきなり大声を出した魔理沙にアリスはビクッと肩をすくめる。
「お前と会った時に話しただろ！私はこんな異変さっさと解決して、また皆で馬鹿みたいに騒ぎたいと。お前みたいなそんな気が狂ったような行動なんて取りたくないんだ！」
「魔、魔理沙……」
　アリスは肩を震わせて怯えている。魔理沙は続ける。
「お前みたいに一時の快楽に身を任せたらどうなる？この狂った異変を起こした本人の思惑通りだ！この人殺しめ！」
　その言葉を聴いてアリスは眼を見開き、プツンと糸が切れた人形のように崩れ落ちる。地面に足をつき、頭を垂れているアリスの口から再び不気味な笑い声が漏れ始めた。
「ふ、ふふ、ふふふ。そっかぁ。魔理沙とは気が合うとばかり思ってたけど、違ったのね……じゃあ、仕方、ないわよね……」
　アリスが顔を上げて魔理沙を見つめてフラフラと立ち上がる。
「このままだと、魔理沙は他の誰かにたべられちゃう。魔理沙は優しいから……なら、いっそ」
　アリスがブツブツと呟きながら刃物を魔理沙に突きつける。
「他の人に渡すくらいなら。私が殺るわ。」
「ア、アリス……何を！？」
　咄嗟に魔理沙はポケットに手を入れ、八卦炉を取り出そうとするが、その間にもアリスは刃物を向けて魔理沙との距離を縮めるべく突進する。
「他の人には渡さない！私と溶け合いましょう。魔理沙！」
「！！」
　魔理沙が八卦炉をアリスに向かって構えた時、既にアリスの身体はすぐ近くまで迫っていた。アリスは刃物を右肩の辺り、ちょうど魔理沙の左胸の位置に構えていた。魔理沙はもう避けようがないことに気付き、眼を見開く。そして、アリスが全身で魔理沙にもたれかかった。
　ぶつかった衝撃で魔理沙の帽子が後方に飛び、パサッと音を立てて地面に落ちた。魔理沙の口から微かな笑い声が漏れる。魔理沙は片手でアリスの頭に手をポンッと置いて、静かに眼を閉じた。魔理沙の手から力が抜け、手から八卦炉が落ち、地面を暫く転がった後にカランと乾いた音を響かせて倒れる。アリスが持っていた獲物から手を話し、顔を上げて魔理沙の顔を見つめる。その時に支えの無くなった魔理沙の身体は力なく地面に伏した。
　一連の流れを見ていたリグルは震えて動くことが出来なかった。昨夜以降、闘争本能を刺激された人は見たが、ここまで、快楽に浸り、狂ってしまうのは見ていないからだ。これがアリスが元々持っていた本能なのか、毒気の影響を受けやすかっただけなのかはわからない。ただ、リグルは恐ろしかった。
　アリスは暫く余韻に浸かった後、魔理沙の左胸に刺さった。包丁を抜こうとする。深く

刺さっており、アリスは両手を使って抜こうとする。ズッズッと抜けていく。外に出てくる刃は赤く染まっていた。

　暫くしてアリスは全て抜く事が出来た。抜けた時に勢い余ってアリスは転び、尻餅をつく。栓の無くなった魔理沙の身体からは赤い液体が噴水のように噴き出した。その様子を見たアリスが目をキラキラとさせて魔理沙の身体にすりよる。血飛沫がアリスの服を赤く染め上げる。その様子を見てアリスは笑みを浮かべる。

「ああ……魔理沙。ずっと一緒になるから……」

　遠くで見ていたリグルは震える足に鞭打ち、必死に逃げようとしていたが、人里でフランドールに会ったときにように足が全く言う事を聞いてくれない。

　リグルがそうこうしている間に、魔理沙の身体は白い光に包まれて、小さな光の球になった。アリスはそれを見つめて恍惚の表情を浮かべている。光の球はアリスに吸い込まれる。

「ああ。あああぁぁぁ！」

　アリスが歓喜の声をあげる。

（まずい……アリスがこのまま魔理沙の家に戻ったら……）

　次の標的はきっと私、頭ではわかっているのに身体が言う事を聞いてくれない。いかに自分が気の小さくて、弱い妖怪かを痛感した。ガクガクと震えながらも、リグルはなんとか立ち上がり、その場から離れようとしたその時、足元にあった小枝を踏みつけてしまった。リグルの気持ちも露知らず、枝はパキッと高い音を立てた。勿論アリスがその音に気付かないはずがない。リグルが振り返るとこちらを見ているアリスと眼があった。その眼はとてもこの世のものとは思えない、恐ろしい眼をしていた。

「……魔理沙邪魔者がいた」

　ポツリとアリスは呟きながら立ち上がる。リグルは震える足で必死に逃げる為走った。しかし、獲物を見つけた肉食動物のような素早さで追いかけてくるアリスにリグルはすぐに捕まってしまった。

「ぐ……」

　リグルは後ろからアリスに体当たりされ、押し倒される。

「貴女……見てたのね。私と魔理沙が一つになる所……」

　うつろな瞳でアリスはリグルの顔の横の地面に獲物を突き刺す。

「許さない……二人だけの、大切な時間を邪魔して……ただでは、すまさない。」

「う、うあぁぁぁぁ！」

　リグルは悪あがきに手でアリスの顔を掴む。

（嫌だ！死にたくない！チルノ、ミスティア。皆、みんなぁ！）

　その瞬間、リグルの身体の中から何か自分の物でない力が湧き上がって来ているのを感じた。それは胸から手、そしてアリスへと流れていく。とても暖かく、懐かしい力。これは――

（み、ミスティア！？そ、そうか。アリスがさっき言ってた……）

　そう思った時、アリスがリグルの手を払いのけて、両手で眼を覆う。

「う、うぅ……見えない！何も、何も見えない……！何処！何処ぉぉ！助けて魔理沙ぁぁぁ！」

　いきなりの出来事に混乱したアリスはリグルを離し、周りを手探りで探す。その様子を見たリグルは勇気を振り絞り、逃げた。

「あ、あぁぁぁぁぁ！」

　後方からするアリスの声に決して振り向かず、リグルは一心不乱に逃げ出した。

◇

「はぁ……はぁ」

　かなりの時間走った。既に陽が赤く、落ちようとしていることからもう夕方なのがわかる。その間、アリスを含む、誰にも会わなかった事が奇跡に近かった。

「はぁ……はぁ……ここ、どこだろ。」

　走るのを止め、森の中をただ歩いていると、少し坂を登ったところに、花の咲く開けた場所に出た。リグルはそこに見覚えがあった。

「あ……ここ、もしかして」

そう言って暫く歩く、リグルの想像通り、そこには多くの花の咲く花畑があった。その中心にポツンと小さな小屋を見つける事も出来た。
（やっぱり……でも……今この状態で会いに行っても大丈夫だろうか？もしかしたらアリスのように気がふれている可能性も……かと言ってアリスが居るかと思うと引き返すわけにもいかない……きっと、きっと妹紅さんや美鈴さんのように協力してくれるはず……）
　そう思ったリグルは花畑の中に建つ小屋へと歩み寄った。
　リグルは窓から室内を覗く、中には誰も居ないようだ。誰も居ないことにリグルは不安と同時に安堵していた。とその時、リグルは後ろから何者かに腕を掴まれ、手で口を塞がれていた。
「ん!?んんーーっ!?」
　いきなりの出来事に驚いてじたばたしていると後ろから声が聞こえてくる。
「……何処のどなたかしら?人の家を覗きこむのは」
　そう言ってリグルは後ろを向かせられる。そしてその人物と眼が合う。
「あ、あら?リグルじゃない。何をしてたの。」
　そう言ってその人物はリグルを解放する。リグルは呼吸を整えて目の前の人物にむかいあう。
「あ、その。お久しぶりです。幽香さん。」
　風見幽香。花を愛でる妖怪。妖怪の中でも強い部類に入る。その幽香とリグルは、花と蟲という共存しあう種族として面識が何度もあった。春になればリグルが蟲を連れて蟲達の食事をさせ、花は花粉を移動してもらう。その為、リグルと幽香は交流があったのだ。
「で、どうしてこんなところに居るのかしら?」
「あ、あの……その……」
　リグルは少し話すのを迷った。先ほど後ろから掴まれた時にかけられた声が普段よりも冷たく、冷酷な言い方だったからだ。
「……まぁ、立ち話もなんだから、上がりなさい。」
　そう言って幽香は室内にリグルを招きいれる。リグルは黙ってついて行った。

◇

　こじんまりとした室内は綺麗に手入れされていて、塵一つ落ちていないようだ。部屋の中央には小さな机と椅子が二つ。これはリグルが蟲を連れてきた時にお茶を飲む為に幽香がわざわざ用意してくれたものだ。その椅子に二人は腰掛ける。
「……」
　幽香は黙ってリグルを見つめる。その眼からは強要はしない。話したくなければ話さなくてよい。という意志が汲み取れた。リグルはその様子を見ていつもの幽香と変わらない、大丈夫。と確信し、人里の事、魔理沙邸での事、とチルノ達との事は伏せて伝えた。幽香は黙って聞いていた。
「そう……私も昨夜から自身にある違和感には気付いているわ。やっぱりこれは幻想郷の住民全員が同じような症状なのね……」
「みたいです……これで私の話は終わりです。」
　深刻な表情をするリグル、それを見た幽香はリグルの頭に手を乗せてグシャグシャと撫でた。
「そんな顔しない。可愛い顔が台無しよ。」
　可愛いと言われてリグルは少し照れた。それを見て幽香はフフッと笑った。
「安心なさい。もしアリスが貴女を追ってきたとしても、ここに居れば私が守ってあげるわ。だから今日はもう休みなさい。」
「……はい」
　リグルは窓から外を眺める。空には満天の星が瞬き、昨日と変わらず満月が光っている。月を見てリグルは人里で別れた二人の事を思い出す。
「妹紅さん。美鈴さん。今どうしてるんだろう……」
　リグルがそうポツリと呟いたのを聞いた幽香が一瞬だけ険しい表情をしていたことにリグルは気付かなかった。

◆

「ハァ……ハァ」

リグルがアリスから逃げていた頃、遠く離れた山の中で高速でぶつかりあう二つの影があった。
「ぐ……私についてこれるとは、なかなかやりますね。」
「ハァ……ハァ……貴女こそ、よく体力が持ちますね。」
それは人里でリグルと別れた美鈴だった。フランドールから無事に逃げのび、妖怪の山付近で休んでいたところを、そこを通りかかった烏天狗に見つかり、烏天狗の領域への侵入者として攻撃されてしまっていた。
烏天狗は空は飛べないものの、持ち前の身軽さで、美鈴を翻弄し、美鈴は持ち前の体力でその攻撃を耐え、持久戦に持ち込んでいた。美鈴にはまだ余力はあるが、烏天狗は限界に近づいているようだ。動きが鈍り始めた。
（まずい……このままだと負けてしまう。こうなったら次で！）
（向こうもだんだん焦り始めてきたみたい。多分、もうすぐ大技をしかけてくるはず！）
美鈴の読みは当たり、烏天狗は今まで最大の竜巻を起こし、それを身に纏い、美鈴に突進してきた。美鈴は体内の気を練り、身体を硬くさせる。そして腕をクロスさせて風から身を守る。
「うぁぁぁ！」
烏天狗が風の中から出てきて、美鈴に攻撃をしかける。それを待っていたかのように美鈴はクロスしていた手を前に突き出し、烏天狗を掴む。
「なっ！？」
防御を捨て、攻撃に入ってきた美鈴に驚く烏天狗。
「だぁぁぁぁ！」
美鈴はそのまま烏天狗を地面に叩き落し、渾身の一撃を与える。気で硬直させた拳での一撃は消耗していた烏天狗のトドメとなった。
「はぁ……はぁ……ふぅ」
美鈴は呼吸を整える。その間に烏天狗は光の球となり、美鈴に吸収されていった。
「私は……負けるわけにはいかない！」
「あ、文様！」
遠くから声が聞こえる。どうやら巡回していた別の天狗のようだ。
「……」
「よ、よくも……！」
そう言って天狗は手に持っていた刀を構える。
「連戦は流石に厳しい、かな……」
先の天狗の戦いで疲労していて逃げたい気分ではるが、美鈴は新たな敵に向かって対峙する。
「でやぁぁぁぁ！」
「あああぁぁ！」
二つの掛け声が山に木霊した。

（つづく）

〈作者コメント〉
一月空きましたが、続きです。こういう扱いになりましたが、別には私はアリスや魔理沙が嫌いなわけじゃないですからね？本当ですよ？

魅魔様とお呼び

著者：中国

〜〜〜魔理沙宅〜〜〜

魔理沙　「ｚｚｚ・・・」
魔理沙　「ん・・・あ・・・」
魔理沙　「ふぁぁ・・・もう朝か・・・」
魅魔　「もう昼だよ。だらしないのは相変わらずだね」
魔理沙　「げぇっ!魅魔様!」
魅魔　「何さ。そんなに驚かなくてもいいだろ」
魔理沙　「いや・・・ｗｉｎ版移行時に死んだものと・・・」
魅魔　「私は滅びぬ。何度でも甦るさ!」
魔理沙　（この人、こんなキャラだったっけ？）
魔理沙　「で、何の用です？」
魅魔　「魔梨沙の顔が見たくなったので。特に他意はない」
魔理沙　「それっぽくするとツンデレの台詞ですね」
魅魔　「そういうつもりじゃないんだが」
魔理沙　（ツンデレ魅魔様か・・・）

〜〜〜回想〜〜〜

ツンデレってーと、
魅魔　「あんたの顔が見たくなっただけよ!あんたが好きとかじゃないから!」
とか、
魅魔　「いい？特別にあんたの師匠やったげるけど、そ、そういうのじゃないから!勘違いしないでよね!」
とか、
魅魔　「弁当作りすぎちゃったから分けてあげるわ。あ、あんたのために作ったんじゃないから!」
とかか。
これは・・・うん。

〜〜〜終わり〜〜〜

魔理沙　「あるあ・・・ねーよ」
魅魔　「何がだい？」
魔理沙　「年増が可愛い子ぶってもキモいだけだなぁと思いました」
魅魔　「？」
魔理沙　「まぁ、気にしないで下さい」
魅魔　「そうかい」
魔理沙　「・・・腹減ったな」
魅魔　「もう昼だからな」
魔理沙　「何か作ります・・・といいたいとこですが」
魅魔　「料理なぞできんから私に作れ、と。分かったよ」
魔理沙　「そういう事っす。ｗｋｔｋ」
魅魔　（とは言いつつも、料理などできない私であった）
魔理沙　「何作るんです？」
魅魔　「・・・パスタとか？」
魔理沙　「どんな感じで？」

魅魔　「オーロラ風・・・みたいな」
魔理沙　「そうすか。楽しみだ」

～～～十分後～～～

魔理沙　「なんだよそれｗｗｗ」
魅魔　「これをね、手早く絡めるから！」
魔理沙　「何でそんなに増えたんだよ・・・やきそばみたいになってるじゃんかｗｗｗ鉄人ｗｗｗお願いしますよｗｗｗ」

～～～三十分後～～～

魅魔　「このフライパンではね！この量は入らないの！！どんだけ三分で茹でてもここに入れたらビーフンになるの！ビーフンになるの！！（怒）どんなスパゲッティーも！！」

～～～一分後～～～

魔理沙　「魅魔泉さん？落ち着きました？」
魅魔　「まぁ・・・一応」
魔理沙　「と・・・とりあえず食べてみますか？」
魅魔　「そうだね・・・」

～～～五分後～～～

魔理沙　「案外美味かった件について」
魅魔　「なぜか甘かったけど。味噌入れたのに・・・」
魔理沙　「このパスタ味噌入りかよ。エンゲーブだな」
魅魔　「まぁいいんじゃない？美味いし」
魔理沙　「ヒロインの料理は上手いかド下手の二通りだと言うのに」
魅魔　「そういや、神綺の料理は酷かったな・・・なんか増えてたし」
魔理沙　「あいつもかよ・・・増やすの大好きだな」
魅魔　「まぁでも奴はドジっ娘だからな」
魔理沙　「で、そのドジっ娘は一体何を増やしたんです？」
魅魔　「熊本名物いきなりだんご」
魔理沙　「・・・パロをパロってどうすんだよ」
魅魔　「とか言ってみたり」
魔理沙　「嘘かよ」
魅魔　「やんちゃしたいお年頃☆」
魔理沙　「年増が可愛い子ぶってもキモいだけといったはずですが」
魅魔　「地味に心にクるからそういう事言わないでくれ」
魔理沙　「しかし・・・」
魔理沙　（ドジっ娘神綺ねぇ・・・）
魔理沙　「・・・アリだな」
魅魔　「なにが？」
魔理沙　「お母さんは全て許されるのですよ。ドジでもSでも少女でも」
魅魔　「意味符『日本語でおｋ』」
魔理沙　「気にしたら負けですよ」
魅魔　「そう」
魔理沙　「議題『午後の予定』」
魅魔　「寝る」
魔理沙　「・・・太りますよ？」
魅魔　「ぎくッ・・・」
魔理沙　「・・・もしや、図星？」
魅魔　「いいンですぅー幽霊に体重なンてないンですぅー」
魔理沙　「でも、その脇腹・・・」
魅魔　「心のキレイなお友達にはそンなもの見えないンですぅー」
魔理沙　「自機からもボスからも外れてろくな運動してないんじゃ」
魅魔　「そ、そンな事無いですぅ」
魔理沙　「しかもする事ないから外出ない」
魅魔　「そ、それは・・・」
魔理沙　「更に飯なんて作れないからカップメンと菓子が主食」
魅魔　「・・・（泣）」
魔理沙　「そんな時期が、私にもありました」
魅魔　「経験則かよ・・・」
魔理沙　「まぁ肺炎で二週間強制絶食したら元に戻りましたけど」
魅魔　「実話臭いな。二重の意味で」
魔理沙　「もちろん作者も経験した。死ぬかと思った」
魅魔　「やっぱりな・・・」
魔理沙　「・・・ですから、外いきましょう」
魅魔　「そうだな。そうしよう」
魔理沙　「キノコ狩りとか」

魅魔　「頑張るよ」

〜〜〜魔法の森〜〜〜

魔理沙「で、キノコ狩る訳ですが」
魅魔　「あんたキノコ好きだね」
魔理沙「毒殺にも使えますし」
魅魔　「それは酷い」
魔理沙「じゃ、頑張りましょう」
魅魔　「はいはい」

〜〜〜五分後〜〜〜

魅魔　「見つけた」
魔理沙「これは・・・いくち？」
魅魔　「なにそれ食えんの？」
魔理沙「まあ・・・一応は」
魅魔　「ん？何かまずい事でもあるのかい？」
魔理沙「東方三月精で季節外れのこれはヤヴァいって私がいってた」
魅魔　「そうかい」

〜〜〜六十分後〜〜〜

魅魔　「いろいろ見つけたなう」
魔理沙「呟かなくていいっす」
魅魔　「これ食える？」
魔理沙「ドクアジロガサ・・・不可食です」
魅魔　「これとか」
魔理沙「カエンタケ・・・不可食」
魅魔　「それ」
魔理沙「どうみてもクリボーです。大変ありがとうございました」
魅魔　「あれ」
魔理沙「毒キノコ太郎・・・知ってる奴いんのかよ」
魅魔　「全部駄目か・・・この森に食えるキノコは無いのかい？」
魔理沙「いやそれは魅魔様が絶望的なだけです」
魅魔　「不幸だー」
魔理沙「kj帰れ」
魅魔　「そう？かっこいいのに。kj」
魔理沙「私はむぎのんが好きですよ」
魅魔　「・・・で、何か無いの？食い物」
魔理沙「これとか」
つ【ウラベニホテイシメジ】
魅魔　「ふーん・・・」ﾑｼｬﾑｼｬ
魔理沙「そのキノコとよく似たクサウラベニタケって言う毒キノコがあってですね」↑フラグ
魅魔　「へぇー」ﾓｼｬﾓｼｬ
魔理沙「そっちは三大誤食キノコの一つとして有名で・・・あ」
魅魔　「ん？どうした？」ｸﾁｬｸﾁｬ
魔理沙「魅魔様の齧ってるソレ・・・クサウラベニタケです」
魅魔　「つまり？」
魔理沙「間違えちゃったZE☆」
魅魔　「『間違えちゃったZE☆』じゃねえよ！もう食っちまったよ！どうすんだよ！」
魔理沙「まぁ死ぬような毒じゃないし・・・大丈夫かな？」

〜〜〜三十分後〜〜〜

魅魔　「おえぇぇぇぇぇ・・・」
魔理沙「おお。魅魔様の嘔吐なんて初めて見たぜ」
魅魔　「死ぬ・・・これはヤバい・・・」
魔理沙「そろそろ下痢とか頭痛とか腹痛etc．来る頃ですかね」
魅魔　「まじで・・・？」
魔理沙「はい」
魅魔　「もう・・・いっそ殺せ・・・」
魔理沙「え？いいんですか？」
魅魔　「頼む・・・さっさとしてくれ・・・」
魔理沙「了解☆」
彗星「ブレイジングスター」
魅魔　「きゃあ！」
魔理沙「『きゃあ！』って・・・いい歳こいてキモ・・・ないわ・・・」

〜〜〜一分後〜〜〜

魅魔　「・・・ふう。復活っと。・・・お」
魔理沙「どうかしたんすか？」
魅魔　「残機減ったら、体重戻った」
魔理沙「なん・・・だと・・・」

魅魔　「名付けて、自殺ダイエット」
魔理沙「不健康の極みですね」
魅魔　「こまけぇこたぁいいんだよ！」
魔理沙「まぁ、結果オーライって事で」
魅魔　「帰る？」
魔理沙「サー」

～～～魔理沙宅～～～

魔理沙「我が家よ！私は帰ってきたぁ！」
魅魔　「核とか飛んできそうだな」
魔理沙「にしても、疲れたわぁー」
魅魔　「そうだね。主にあんたの所為で」
魔理沙「どういたしまして。帰れ」
魅魔　「だが断る」
魔理沙「じゃぁ、メシくらい作ってください」
魅魔　「ラジャ」
魔理沙「で、何を？」
魅魔　「海老とブロッコリーのスパゲッティーオーロラ風」
魔理沙「死ね」

～～～未踏の渓谷～～～

にとり「暇だ」
にとり「核ならあるが・・・ICBMでも作れと？」
にとり「『核爆「大陸間弾道ミサイル」』・・・危なくて使えんわ」

椛　　「最近は原子力潜水艦搭載型の核とかあるみたいですね」
にとり「おお、椛か。久しぶりだな～」
椛　　「お土産的な物もありますよ」
にとり「そうか。なにかな？」
椛　　「きゅうりです。穴にでも突っ込んで下さい」
にとり「あ、穴ですか・・・」
椛　　「あれ？もう一本欲しいんですか？二穴責めとはマニアックですね」
にとり「やめろよーぅ特にセクハラはやめろよーぅ」
椛　　「セクハラとはひどいですね。ただのきゅうりなのに」
にとり「お前先月もきゅうりとか言って緑色のバイブ持ってきただろ！」
椛　　「あれは電気で動くきゅうりです。無問題です」
にとり「それを世間ではセクハラと言う」
椛　　「私としてはスキンシップのつもりです。問題無いです」
にとり「ってかお前何しに来たんだ・・・？」
椛　　「にとりをおちょくりに」
にとり「今すぐ帰れそして死ね」
椛　　「はいはい」ｼｭﾀﾀｯ
にとり「やっと帰ったか・・・」
にとり「・・・」
にとり「きゅうりうめぇ」

～～～最後に～～～

幽香　「今回も始まりましたあとがきコーナー！」
リグル「司会進行は私、きのこよりたけのこ派のリグルと」
幽香　「ゆでたまごにはマヨネーズな風見幽香です」
リグル「ここではまぁ・・・雑談とかしていく感じで」
幽香　「と言いつつ実は無理にでも私達を出したいだけだったり」
リグル「という訳なのでなにか質問とかある？」
幽香　「じゃあ早速」
リグル「なに？」
幽香　「ツンデレ魅魔様とドジっ娘神綺様のD○KI－D○KI－添い寝ディスクって出るの？」
リグル「アー○グ○○様あたりに頼めば？てか伏字になってないし」
幽香　「半分伏せても分かる不思議」
リグル「添い寝って言っちゃったしね」
幽香　「そういえば本文にそのネタあったわね」
リグル「ネタやりたいがために書いたくだりも結構あるよ」
幽香　「むしろそれだけで成り立ってるわよこれ。そんなんでいいのかしら」
リグル「書きたい事書けばいいんじゃな

い？」
幽香「そんなものかしら」
リグル「そーゆーもんだよ」
幽香「そう。ところで素で旧作出てるけどいいの？」
リグル「大丈夫だ。問題無い」
幽香「>>301ネタとか有名だし大丈夫よね」
リグル「見つけたらｶﾞｯしてやる」
幽香「あとは・・・魅魔泉の絡みについて」
リグル「○泉さん最近よく見るね」
幽香「俳優だったのね。芸人だと思ってたのに」
リグル「まぁ、あの番組は芸人のノリだし」
幽香「幻想郷でもできるかな？ど○○○ょう」
リグル「狭いしねぇ・・・やった所で面白くは無いんじゃない？」
幽香「そうか・・・。無理か・・・」
リグル「創○？」
幽香「違う違う。そのネタはやめなさい消される」
リグル「舞浜のアイツとか？」
幽香「夢の国関連は冗談にすらならないからね？」
リグル「これ以上は命の危険を感じるのでこの話題はここまでで」
幽香「そうね。じゃあ、何で魔理沙の口調は安定してないの？」
リグル「それは仕様としか言いようがない」
幽香「次・・・なんでキノコ狩り？」
リグル「魔理沙と言えばキノコじゃん？」
幽香「それだけかよ」
リグル「そういや少しキノコじゃないのも混じってたね」
幽香「クリボーはまだしも・・・毒キノコ太郎って有名なの？」
リグル「さぁ？知ってる人はあのギャルゲやってる人だし」
幽香「携帯ゲーム版の8でエロゲになってたアレね・・・」
リグル「しかも全年齢対象」
幽香「CERO仕事しろ」
リグル「他に聞きたい事とかは？」
幽香「ないわね。というか疲れたわ」
リグル「そろそろ〆る？」
幽香「そういう事にしときましょう」
リグル「ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございました」

（終）

〈作者コメント〉
でも魅魔様の搾乳ならちょっと見たいかも

名無し妖精

著者：くろと

～あらすじ～
小物妖怪リグルはある日、幽香に首輪で繋がれる。命からがら逃げ出したのも束の間、首輪を一目で気に入ったこいしによって地底に連れ去られたのだった。

こいし様が地上から新しいペットを連れてきました。なんでも蛍の妖怪らしく、私が見たときには売られた子牛の目をしていました。あ、お燐さんがスペル使うみたいだから行かないと。

疲れた。疲れました。

最近、地底に現れた白黒な魔法使いは地上でも有名な泥棒らしく、地霊殿に忍び込んでは書物や絵巻物を強奪していきます。まぁ、すぐにお燐さんやお空さんに見つかるのですが。問題はその強さです。この魔法使い、どうにもパワーに比重を傾けた弾幕を張ってきます。魔法使いの弾幕はブレインだと聞き及びましたが、この泥棒魔法使いにはその常識が当てはまりません。忍び込む時はこそこそとしているのに、見つかると力尽くで突破していきます。非常に迷惑です。これならば妖怪のほうがマシです。

と、そうでした。先ほどの売られた子牛の目をした妖怪、もとい蛍の妖怪ですが、早速、こいし様の下から逃げ出していました。元気な妖怪です。お燐さんとお空さんに蛍の妖怪捜索が任せられ、私にも捜索が命じられました。さて、どこから捜しましょう。地霊殿はそれなりに広いですから、隠れる場所もいっぱいあります。それに相手は妖怪、見つけても捕縛できなければ意味がありません。

「もーいいよー！」

あの大声はお空さんかもしれません。いえ、お空さんでした。どうもかくれんぼと勘違いしています。所詮は鳥頭です。今からするのはかくれんぼではなくオニごっこなのに。

「それも違います」

いつから居たのか、さとり様が溜め息を吐いて呆れていました。この少女、なんと地霊殿の主人で、お燐さんやお空さんの飼い主です。とてもとても偉いのです。胸は小さいですが。「黙りなさい」怒られました。

さとり様は嫌われ者が多い旧地獄でも特に嫌われています。それこそ友達じゃないから近づかないでください。と言わんばかりに嫌われています。きっとまな板だからです。「心が読めるからです」すごく怒られました。

そんなさとり様には弱点があります。妹のこいし様です。実妹であり心を閉じてしまったこいし様にはさとり様も甘々です。あと、こいし様の方が大きいです。「折檻しますよ」ものすごく怒られました。

叱られて大人しくしていると、向こう側から件のこいし様がやってきました。

「お姉ちゃんー。りぐるんはー？」

「今捜しています。というより、こいしも捜しなさい」

どうやら蛍の妖怪はりぐるんという名前だそうです。しかし、りぐるん、地上の妖怪の命名センスでしょうか、なんにせよ地上に生まれなくて良かったです。

「そうですか。なら今日から名前をルンルンに改めなさい」

三回ほど土下座したら赦してくれました。流石はさとり様、心が広いお方は違います。

「さとり様ー。蛍、見つけましたー」

かというちにお燐さんがりぐるんを発見していました。私の手柄が水の泡です。ですが、なんというかその、りぐるんは滑車に乗せられて文字通り虫の息でした。弁護するわけではないですが、お燐さんは地霊殿でも優秀な火車であり、私の雇い主でもあります。

どれだけ優秀かといえば、先の異変では解決の糸口を見つけ、それを実践するほどです。それに胸も優秀です。「躾が必要ですね」さとり様、グーは止めてください。
「それにしても……お燐、どうして手加減しなかったの」
「面倒でして、それにあたいは猫ですし」
そういえばそうでした。お燐さんは猫、虫に手加減なんて出来ません。
「あーあ、りぐるんがボロボロだよー」
「仕方ありませんね。騒ぎになる前に地上に帰してきなさい。この子のためにも」
こいし様が残念そうですが、さとり様が言うように、それがりぐるんの為にもなるはずです。でも気のせいか、その言葉を聴いた屁気味なりぐるんが一瞬だけ怯えた気がします。
「訂正します。帰す必要はありません」
なぜかさとり様が前言撤回しました。ここまで急激な心変わりも珍しい事です。しかし、りぐるんを凝視する事で、私は得心しました。なんと、りぐるんはさとり様と同じぐらい胸が、「もういいです」再生するのに三日ほど掛かりました。

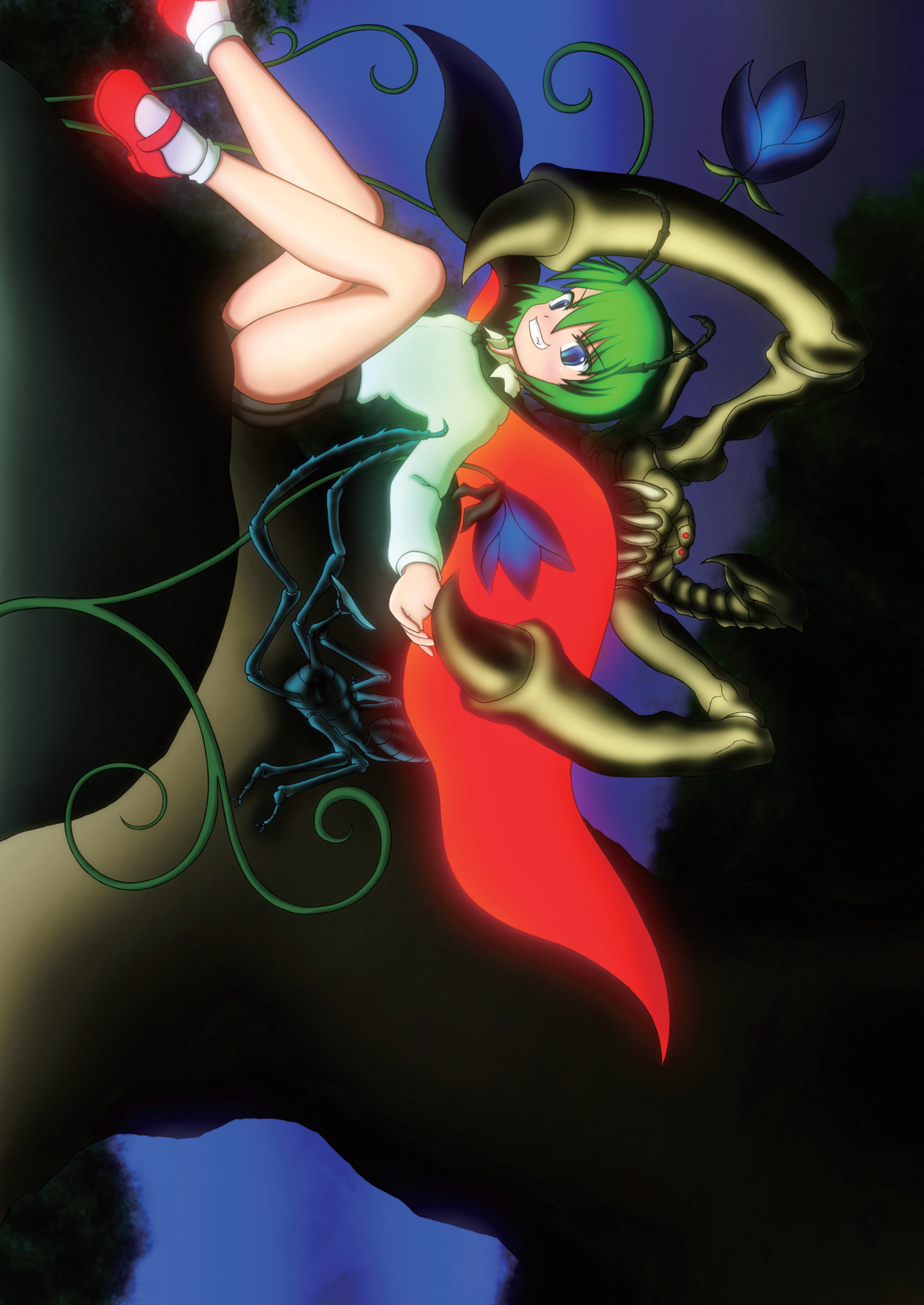
熱かい悩む太陽神ことお空さんは今日も元気です。元気にりぐるんを燃やしています。あ、お燐さんが呼んでるから急がないと。
今日も泥棒でした。正直、辛い仕事です。転職考えようかな。

あれから、りぐるんはこいし様のペットを続けています。でも肝心のこいし様は彼方此方に出歩く夢遊病。なので、お燐さんやお空さんと仲良く遊ぶ事のほうが多いです。もっとも傍から見ると烏と猫の狩猟にしか見えません。私とも仲良くなりました。意外な事にりぐるんは別段、地上には帰りたくないようです。その理由を聞いたところ、「……地上には危険が数え切れないほどあるんだ。巫女とか殺虫剤とかフラワーマスターとか」トラウマなのか体が小刻みに震えています。
「紅茶を淹れてください」
さとり様からの命令です。私とりぐるんは紅茶の準備をします。ですが、ただ淹れたのでは面白くありません。ここは一つ、ロシアンルーレットを採用した新たな試みを、「一番左ですね。あと紅茶紛いは責任もって飲みなさい」どうしよう。
さとり様は一番左の紅茶を受け取り、一服してから机に置きました。その机には幾つかの書物と一緒に西洋人形や小さな珠も並べられています。それらは地上と繋がる通信機だそうです。異変以降、さとり様は頻繁に地上と連絡を取り合っておられます。どういう経緯があったかは知りませんが、疎遠だった関係の修復には丁度いいと感じられたのでしょう。でも、会話に度々出るパッドってなんのことでしょうか。りぐるんに聞いてもナイフが怖いとかでお茶を濁します。もしかしたら地上で開発された新兵器なのかもしれません。
「さとり様！　侵入者がッ！」
お空さんが慌てふためいています。さっきの魔法使いでしょうか、それにしては些か慌てすぎです。もしかしたら紅白巫女のほうかもしれません。巫女は凶悪です。前回の異変では気だるげでやる気の足りない態度でしたが、神出鬼没に高速移動、さらには触れずに物を集める神通力すらも発揮しました。あれはおかしいです。特に腋が。
「それでどうしました？」
さとり様には言葉が要りません。思考を読めるから話す手間が省けるのです。「なんですかそれは……！」そのさとり様が非常に驚いています。どうやら事態は深刻なようです。でも私が居る限りは大丈夫。これでもお燐さんとの連携は上手で、たとえ百戦錬磨の巫女だろうと引けはとりません。
「勇儀さんを退けるほどの妖怪がいったい何故……？」
転職します。

残念ながら辞職願は却下されました。地霊殿では私の立場、発言権ともに低いのです。四天王を倒すほどの大妖。きっと他に類をみないようなバケモノに違いありません。あるいは少し前に地上に出たという鬼かもしれません。
「さとり様まで出張ることは……」
今回は珍しく、さとり様も前線に立ってい

ます。そのためペットのお二人は気が気ではありません。なんだかんだで人望があり、とても立派な死亡フラグです。「想起」ごめんなさい。
「いいですか。実力で鬼を倒せる相手となると、これはもう戦力を割いた人海戦術では手に負えません。かといって罠を張っている時間もありません、火海戦術で正面から叩き潰します」
　火海戦術とは近代兵器等で敵を圧倒する戦術を指します。月面戦争でも月人たちが用いたという戦術です。要するに後先考えずに撃ち続けろ。という解釈です。
　自陣を組んでからおおよそ半刻、そのときが来ました。その妖怪は地底であるにも関わらず日傘を差しており、それが咲き誇る花弁のように印象的です。薄緑の髪はウェーブが掛かっており、その顔は微笑みに満ちています。
　とてつもなく危険な芳香が漂います。
「行くよ、お空！」
「わかってるって！」
　撃つべき標的を視認したお空さんとお燐さんが躊躇わずに同時攻撃を仕掛けます。熱量と怨霊を軸にした神業的な連携、これにさとり様の第三の目が加われば無敵と言っても過言ではありません。
「こんな……！」
　いきなり、さとり様が動揺していました。これは今までにない事態です。相手の心を読めるさとり様はどんな相手にでも対応します。そのさとり様が、まるで未知に遭遇したとばかりに動揺しています。
　いったいなにが。
「大きすぎる……！」
　さとり様が呟いた独り言、それが真実を語っていました。日傘を差した女性はもはや、さとり様には理解しがたい領域に達しています。
　なんにせよ司令塔たるさとり様が混乱に陥った為、指揮系統が乱れ、場は乱戦状態。もっとも敵妖怪は律儀に全員を倒しながら真っ直ぐに進撃してきます。辿り着くのは時間の問題でしょうか。
　私はといえば急いで帰り支度を済ませます。「土にでも還りますか？」さとり様が復帰しました。とはいえ顔色は優れず、足もふらついています。相当の精神的ダメージがあった模様です。しかし、何かしらの対策を得たように、さとり様は私に命じてきます。
「リグルさんを連れてきてください。すぐに」
　その態度は有無を言わせず、私に行動を行わさせます。りぐるんを連れてくると、その表情が動揺から硬直へと豹変し、間髪入れずに逃げ出しました。ですが、「そんなところに居たのね」快進撃する女性が容易く撃ち落としました。
　さとり様の提案で戦線は休戦状態となりました。ただし、こちらの戦力はお燐さんとお空さん、さとり様の三名しか残っておらず、事実上の敗戦です。そして、りぐるんとこちらの幽香さんは知り合いのようで、数日前に姿を消したりぐるんを捜しに単身地底に乗り込んできたようです。なんとも心温まるハートフルな理由です。さとり様は胡散臭いものを見る眼差しでしたけど。
「それで、返してくれるのでしょう？」
「疑問符はいりません。これ以上、大事にしたくはありません」
　話し合いはまとまり、りぐるんと交換に風見さんには地上へと帰ってもらいます。その際、りぐるんは死んだ魚の目をしていました。
　きっとお別れが辛いんです。だけど、大丈夫ですよりぐるん。だって死んだら地霊殿に永久就職ですから。

（終）

〈作者コメント〉
Q　どうしてリグルは苛められるの？
A　とても可愛いから。二重の意味で。

非金属アレルギーの人＋

ひきんぞくあれるぎーのひとぷらす

課題

twitterにて「リグルと絡ませたい日用品」を募集。挙げられた日用品の中から３点を選び、それをもとに漫画を描くこと。

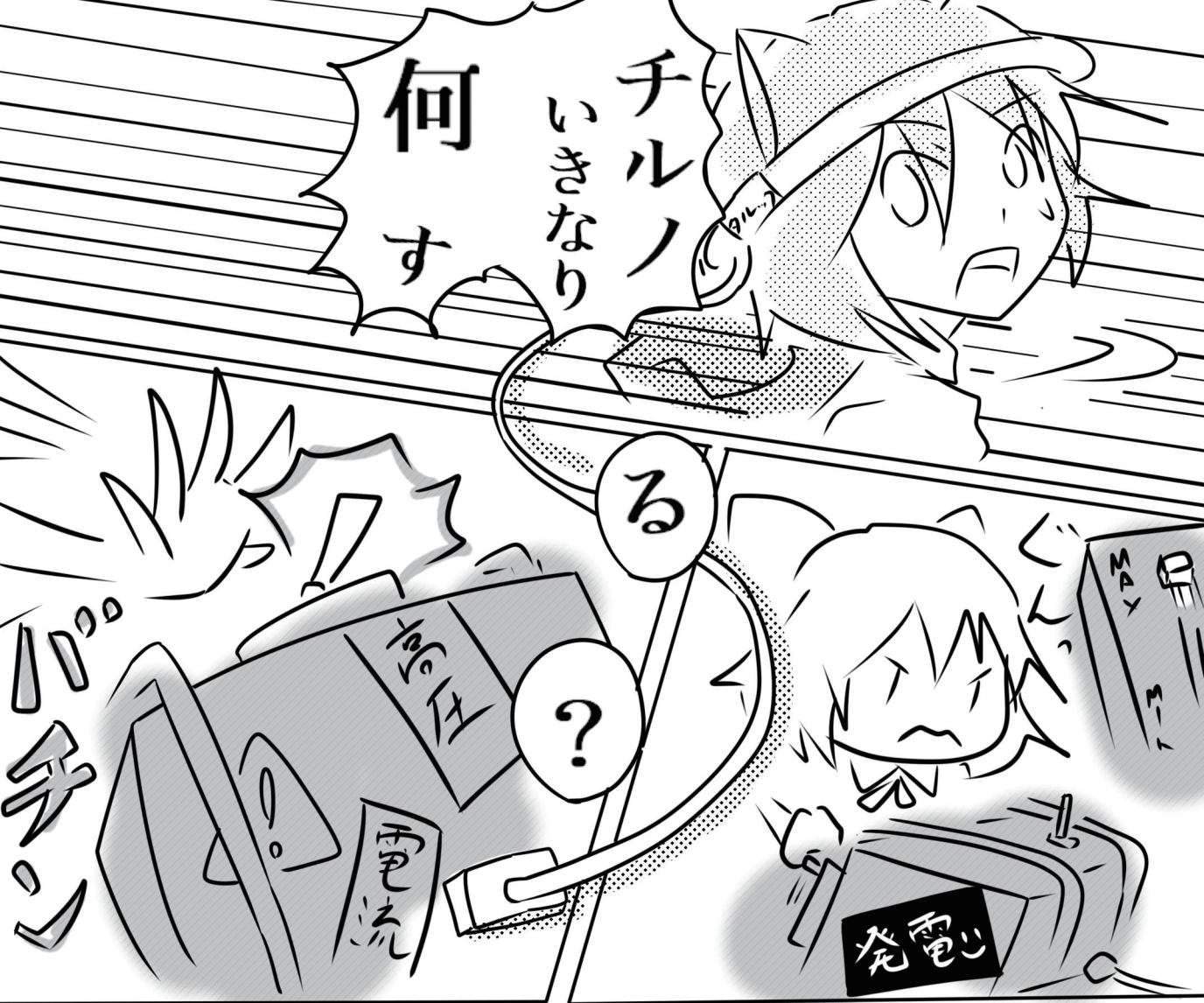
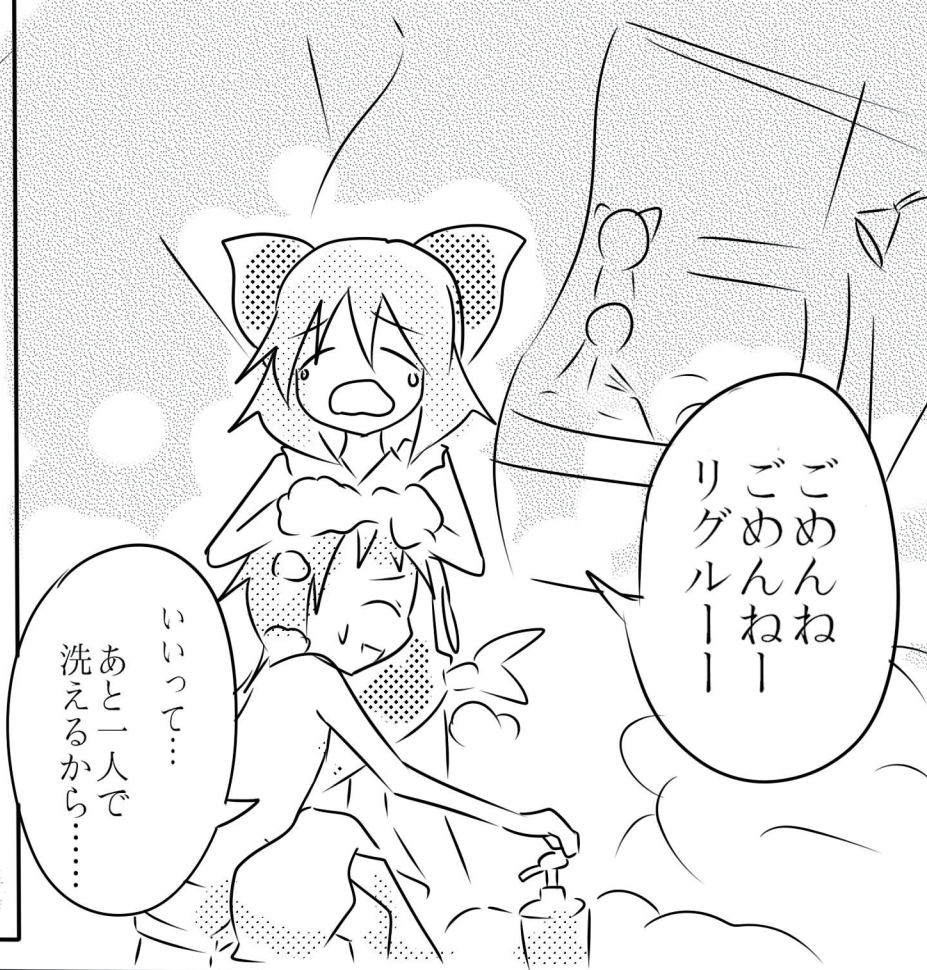
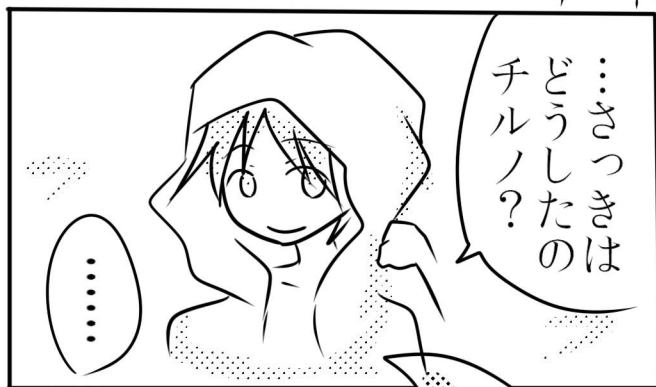
挑戦者

イリイチ

チュートリアル

ソファ × 蛍光灯

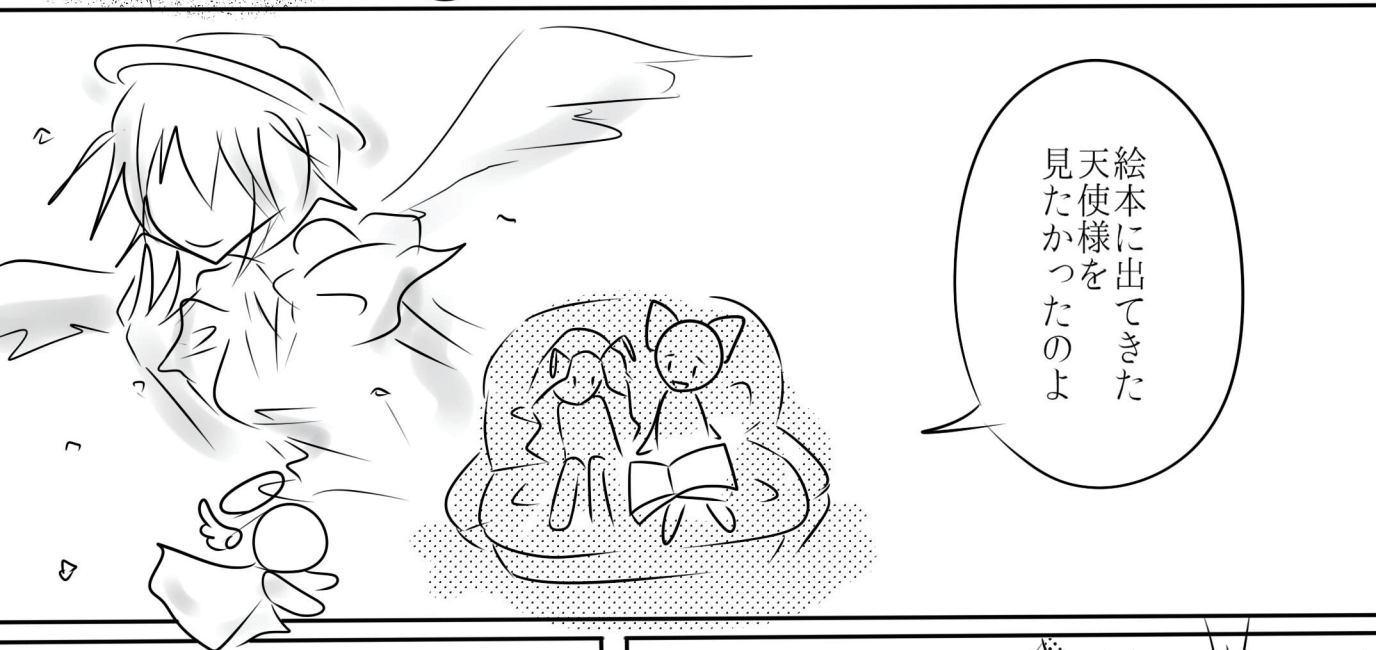
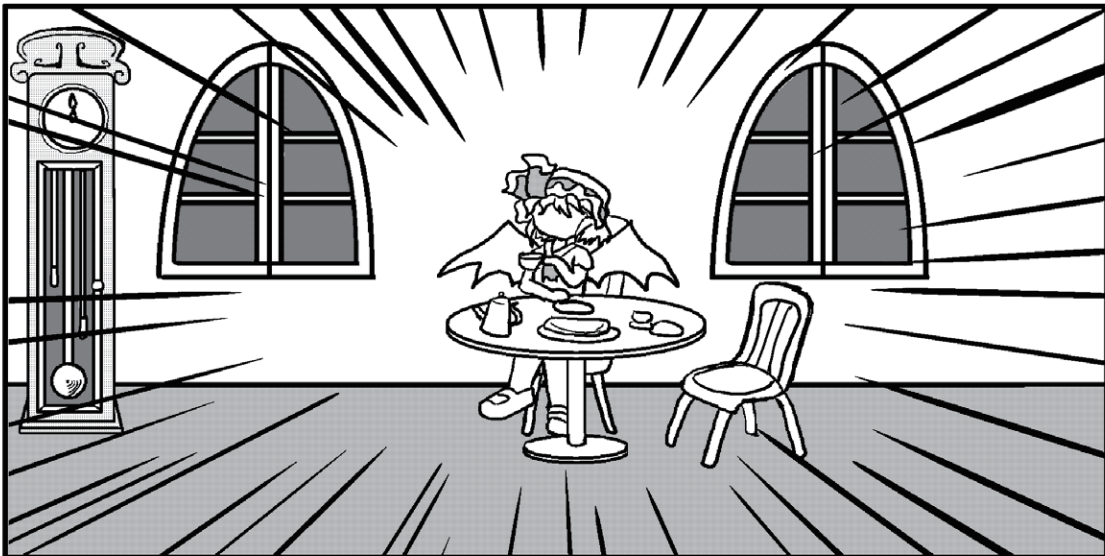
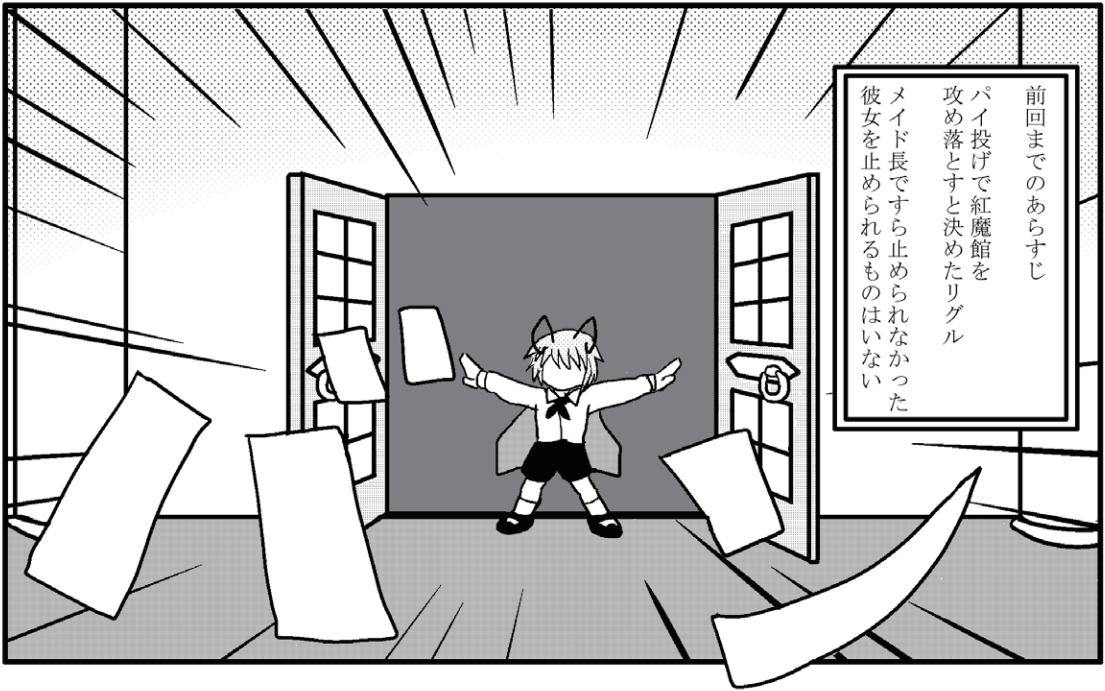
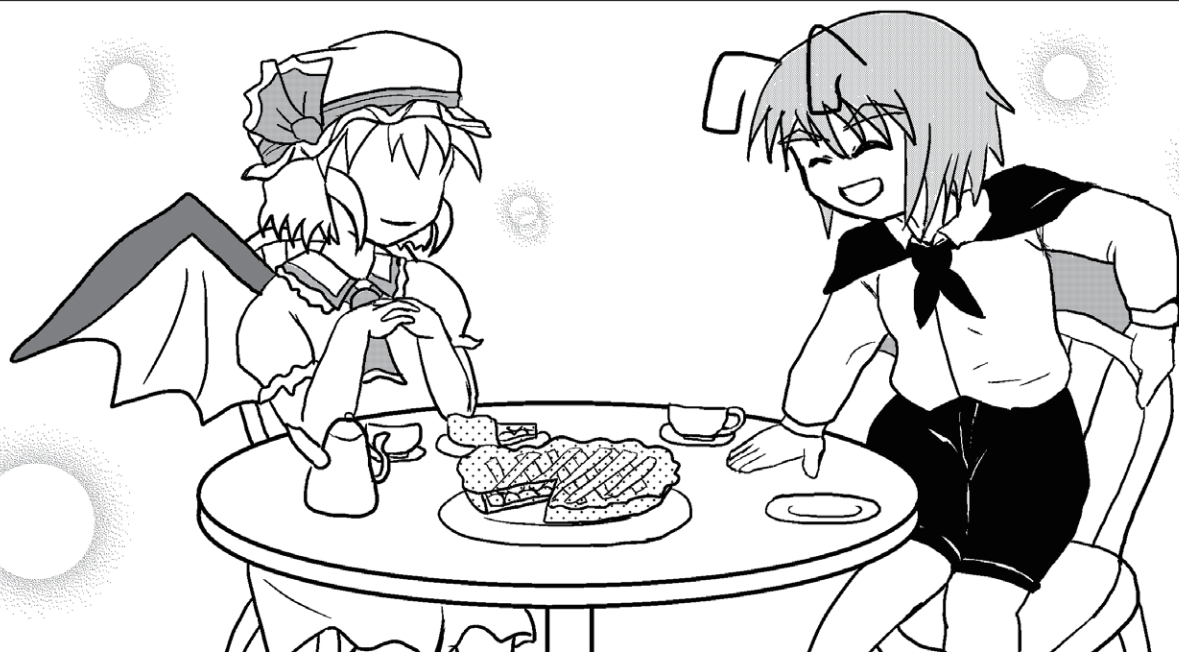
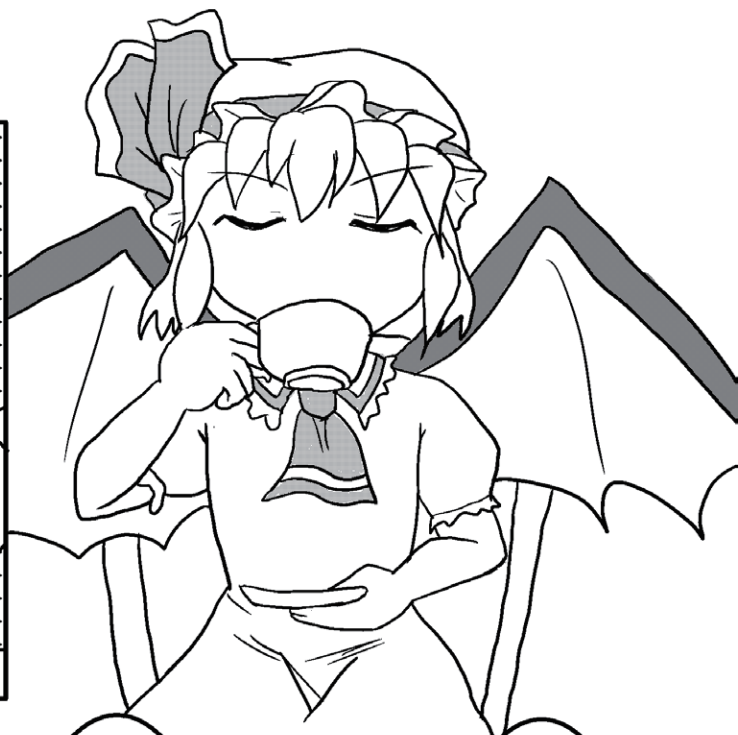
どーん
リグルー!!
チルノ
どうした…の…
非金属アレルギーの人＋＋
ヨノヒカリトナロウ
いいっ!!?
ポイッ

何す
チルノ
いきなり
る
?
じんっ
MAX
MIN
!
パワロ
パチン
高圧
電流
発電
シュうううう
ケホ

ごめんね
ごめんねー
リグルーー
いいって…
あと一人で
洗えるから……
破片が危ないから
とりあえず
ここに座って…
ぽんっ
うん…
…さっきは
どうしたの
チルノ？
……
天使を…ね
？

輪っかを
拾ったの…
河童に聞いたら、
これは世界を
照らす素晴らしい
発明だって
言うから……
これを使って
絵本に出てきた
天使様を
見たかったのよ
チルノ
ファサ

ほら
天使の輪
すてき
リグル すてき
fin

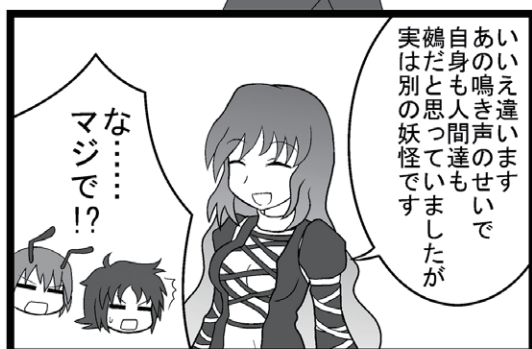
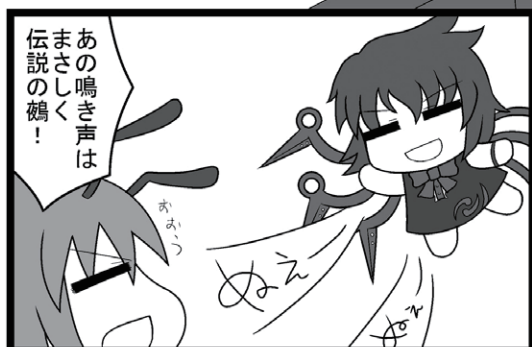
リグル紅魔を行く3

preludenano

あら、
お客さん
カチャ
ちょうど
よかった
チェリーパイ
一緒に食べていかない？

欧米かっ
ブチャッ
fin.

リグぬえと生贄って似ているよね

羅外

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

ゆき
キッカ
p2

うちの周り雪なんて滅多に積りませんが、冬と言えば雪。
いつものように安直。

ミスリグときどきリグリリ
残虐非道の貴公子
26p

４コマに初挑戦

オユキコジョロ
斑
9p～14p

雪虫、北国在住の方だと結構知っているのですが、
関東以南だとやはり知らない方も多いようで。
彼等が来ると上着が一枚増えたのも懐かしい思い出です。

Deadly Nightbug
Jade.
42p

パロは、作者の両作品へのリスペクトの発表の場。そこに、見る人が
わかるかわからないかは何も関係ない。むしろ、片方への興味から、
もう片方への興味を喚起させる事こそ、パロの真髄だと考えています。
90年代のMtGとかわかる人いるのか……

冬でも半ズボンの子がクラスに一人はいたよね
東
15p～18p

冬といえば、レティさんですよね！
あと冬コミ！受かってたよ！　（今回の原稿はこの前の
例大祭で出た１ボス合同誌に寄稿した原稿です）

非金属アレルギーの人＋
イリイチ
43p～49p

ネタを渇望した結果、信頼する仲間たちから数々のお題という
名の日用品を貰い受けた！！楽しい試みでしたが…
二度とやんねぇｗｗ

東方茶湾虫
クロツク
19p～21p

寒くなりましたね。ほんと今月もギリギリでした・・・。

リグル紅魔を行く３
preudenano
50p～52p

フランドール：「汚れるのが嫌だからってパイを受ける前にあらか
じめ帽子を取るのは甘えよ、お姉さま。」

When they Wriggle
13
22p

燃やしたったっす。

リグぬえと生贄って似ているよね
羅外
53p

試行錯誤なう。

リグルともこたん
ぼこ
23p

妹紅さんの様に髪を中に入れてマフラーを巻くと、顔と首が
髪の毛でかゆくなります。

幻想郷の冬
モフパカ
55p

切なげな雰囲気のりぐるんもまた良いものです・・・

無題
草加あおい
24p～25p

冬→北国→北海道　という連想でレティさんを北海道弁に
してみようかと思ったけれど良い会話を思いつかなかった
でござるの巻き

表紙
小崎

キリギリス：
アリアリアリアリアリ……アリノスコロリ！（さよならだ）

NEXT▶ 次号1月号は12月22日（水）発行予定！

※次号の投稿締切は12月15日(水)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG　2010年12月号

2010年11月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

Jade.
preudenano
羅外
くろと
中国
悠奈
ADDA
キッカ
モフパカ
貴キ
蛍光流動
言示弄
怒羅悪
13
クロツク
残虐非道の貴公子
草加あおい
東
斑
イリイチ
ぼこ
小崎